

# すっかんぽ

1991年10月号

## 赤トンボとヒガンバナ

秋には赤い色がよくにあう。

夕焼け、赤とんぼ、そしてヒガンバナ。それらが全部そろった、さぞかし壮観であろう。秋の夕陽を浴びて群れ飛ぶ赤とんぼと、田んぼのあぜ道いっほいに咲いたヒガンバナ……。

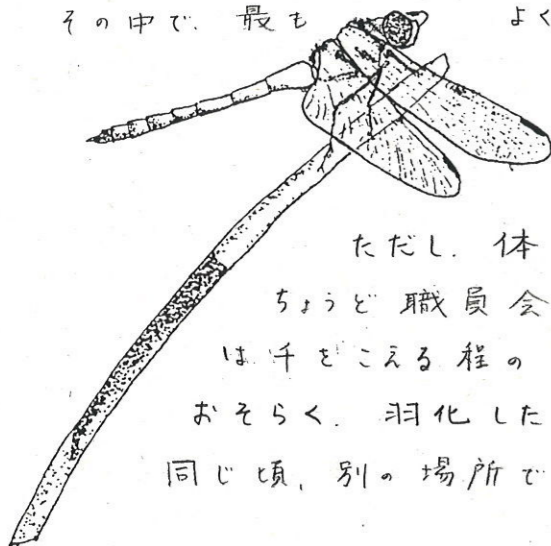
しかし、こうした風景は、現実にはあまり期待できない。なぜなら、赤トンボが活動する時刻は、主に午前中で、夕方まで群れ飛んでいることは、ないからである。

ところで、一口に、赤トンボといっても、日本には約20種がいる。その中で、最もよく見かけるのは、何といっても“アキアカネ”。アキアカネは、秋になってから出てくるものと思われている人が多いが、実は6月ごろには、もう成虫になっている。

ただし、体の色は、赤くはない。6月26日、

ちょうど職員会議が終わったころ、空は数百あるいは千とこえる程のトンボでおおわれていた。

おそらく、羽化したばかりの成虫（未熟成虫）なのだろう。同じ頃、別の場所でトンボの大群を見た、と教えてく

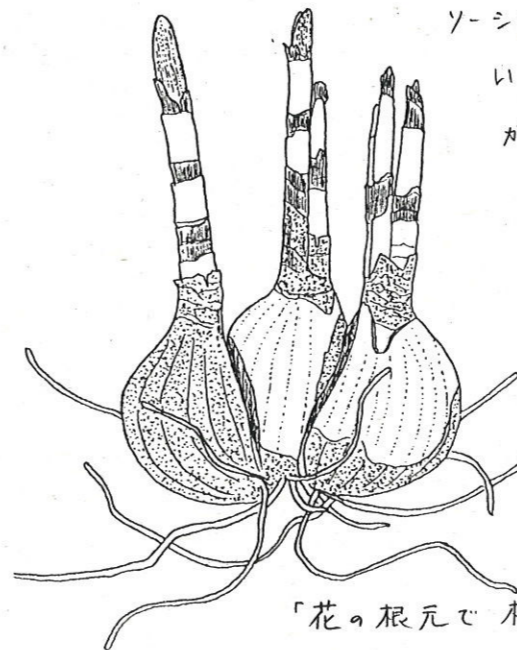


れた生徒もいた。アキアカネは、羽化地を離れ、1000mとこえる高原で夏をすごし、その間に、体色は赤味を増していく。そして、秋になって、再び平地にもどってくる頃には、真赤な色づいている。というわけなのだ。そして、稲刈りの終わった田んぼに産卵し、

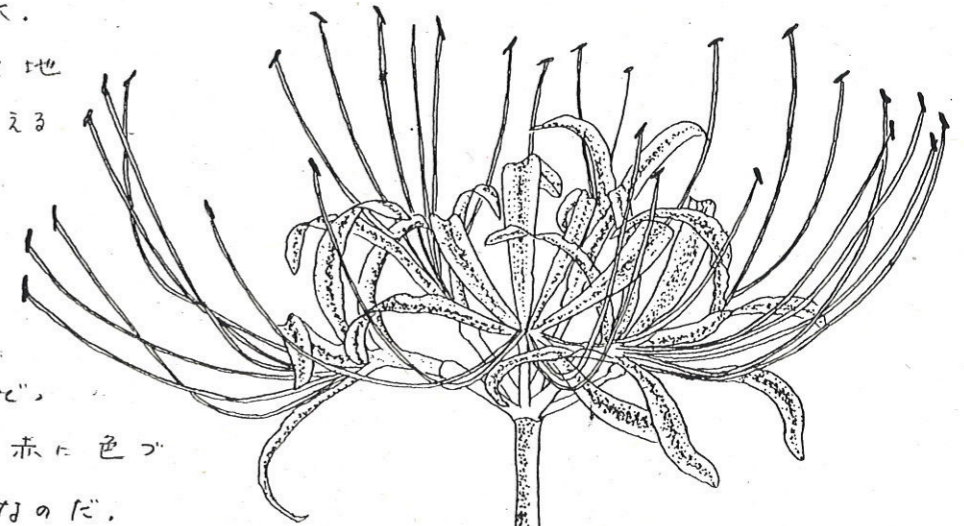
ということは、まだ稲作を行っていたなかた、赤トンボは、あまりいなかたことになる。人々田んぼを広げていくにつれ、アキアカネも分布していたのである。古代の人々にとって、される赤トンボは、実りの秋の象徴である

ところで、ヒガンバナには、全国に50以上ものがある。たとえば、オヤコロシ、カブレバナ、シレ

ソシキバナ、ホトケバナ、いずれも、“りん茎”（がに含まれていることしかし、確かに有ききの時は、さらにさらに、有毒ポンと、て食手間もかかり、命取りになる



「花の根元で株分かれていたりん茎」(約0.7倍)



その一生を終える。古代の日本には、が湿地をたがやし、と日本中に拡大、アキアカネに代表、たのである。

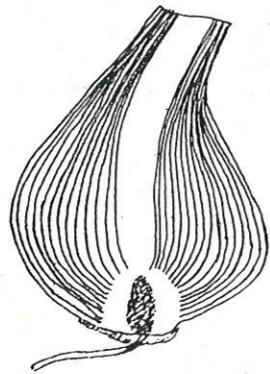
地方名(方言)がイバナ、ジゴクバナ、ユレイバナ。種の球根)に強い毒に 関係がある。毒では、あるが、りつぶし、数回、水成分を除き、ゲン用としていた。一歩まちがうと、危険な食品だった。

(ウラミ)

ヒガンバナは、もともと日本に自生していたものではなく、  
 中国から古代の日本に持ちこまれ、人々の手によって広  
 まっていた植物であるらしい。その根拠となるのが、  
 ヒガンバナは花は咲くが種子ができません。株分けによ  
 ってふやすことしかできないことだ。ヒガンバナ  
 が、咲いている所は、田んぼのおせ道や人家の近く  
 に多いのは、人々がそこに植えたことを意味している。

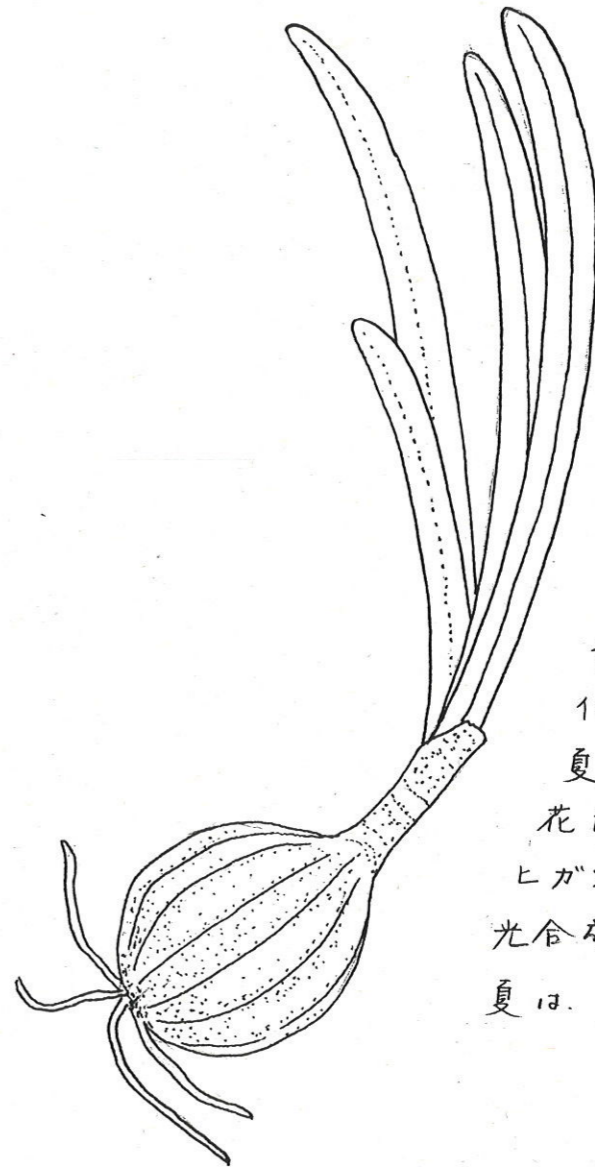
いつごろ、日本に持ちこまれたかは、わからないが、  
 古代の日本人が稲作を日本中に広げてゆく際にも、  
 一種の救荒食品として、大切に伝えていたのでは  
 ないかと思う。そして実際に、この赤い花  
 に 飢えから救われたこともあったことだろう。

赤トンボとヒガンバナ。我々日本人にとって、  
 それぞれの背景にあるイメージは、正反対であるが、  
 今となっては、どちらも、秋の一日を楽しませてくれる  
 大切な風景となっている。



「りん茎の断面」  
 (ほぼ実物大)

- ・ 根の上に、りん茎を置いたままにしておいた。  
 約1ヶ月後にみると、葉がこんなに伸びていた



(ほぼ実物大)

葉は、花の終わった後、  
 伸びてきて冬を越し、  
 夏には枯れる。その後  
 花だけが咲く。  
 ヒガンバナは、冬の間、  
 光合成として養分をたくわえ  
 夏は、休んでいるのである。